

ある地域研究者の軌跡

—インド地域研究者としての荒松雄氏—

砂 地 恵 美

インドを対象とした卒論を書きたいと思ったものの、自分のインドの理解がまだ不十分であったため、試行錯誤の結果、このテーマに至った。本論の目的は、インドに造詣が深い研究者、荒松雄氏の研究の軌跡を追うことによって、インドの正確な理解への手掛りを得ることである。

第Ⅰ章では、荒氏の主要な活動と功績を略歴図とともに紹介した。

第Ⅱ章第Ⅰ節では、氏の主要な研究について、それぞれの研究における問題意識を重視しつつ、その概要を記した。その際、氏の研究の変遷を理解しやすくするため、時期区分を試みた。ここでの結論として、荒氏の問題意識には、従来の日本人の盲点をついたものがかなり多いという特徴を見出だした。

第Ⅱ節では、荒氏の著作を年代順に記し、かつ、独自に、研究内容に基づく分類を行った。

第Ⅲ章では、様々な研究者から、氏がどのような評価を得ているのかについて、書評等の記述から、明らかにした。その結果、荒氏は日本におけ

るインド研究の先頭に立つ研究者であり、また、氏の研究者としての資質がひろく認められていることが分かった。

Ⅱ、Ⅲ章では、研究者としての荒氏が明らかになったと思う。第Ⅳ章では、95年11月22日に行った、荒氏へのインタビューをもとに、荒氏のインド研究を方向づけたものを明らかにした。また、未来社の本間トシさんのお話から、荒氏の研究者として以外の側面もある程度明らかにできたのではないかと思う。

第Ⅴ章では、荒氏が長期にわたってインド研究を持続できたのは、氏がインドと自分とのかかわりを作り出すことによって、インドを身近に感じ続けられたからなのではないかという結論に至った。

おわりにでは、地域研究とはどうあるべきかという問題について、Ⅴ章までで分かった荒氏への理解をもとに、考察した。その結果、地域研究者はできるだけ研究成果を一般人にも分かる形で、公表してほしいという希望を述べた。

外国人花嫁をめぐる農村の現状

—新潟県中魚沼郡川西町を事例として—

砂 田 美 緒

1960年以降の高度経済成長期を通じて、日本の産業構造は重化学工業を中心とする構造に変化していった。それに伴い、農村から都会へ大量の労働力が流出していき農業就業人口の減少は著しかった。一方、農家戸数も減少したが、その減り方は農業就業人口数より緩やかであった。それは、農家の世帯員の中に他出者が多いこと、農村部でも核家族化の傾向が浸透したこと、兼業農家が増えたことなどによる。

兼業農家の進展で農村家族にも変化が起り始めている。一つの家族内に農業労働者と賃金労働者が生まれることによって、「家」の観念が弱まってくる。しかし家父長制の弱まりとは逆に、

直系家族の性質はそのまま残った（長谷川、1993）。小規模経営が多い兼業農家では昔の傍系親族を含んでいた家族の数を減らしながら、直系家族を維持する方向に働いたからである。

国際化も様々な形で活発になってきた。日本の経済的地位の向上により、日本の男性と外国の女性との国際結婚が珍しくなくなった。

昨今の国際化の流れのなかで、農村の嫁不足の一つの対応策として農村男性とアジア女性との国際結婚が生まれてきた。この結婚は社会的性質の強いものであり、結婚までの過程が短く人権問題の面から非難の声が相次いだ。各国もそれぞれこの結婚を禁止し始めている。しかし、来日した花